

キッズの日はキズケアの日

那覇市立病院 吉田 絵理



形成外科が診療する疾患の範囲は非常に幅広く、外傷・熱傷、先天異常、良性/悪性腫瘍とそれに関する再建、癬痕・ケロイド、DM 性足潰瘍や放射線潰瘍、褥瘡などを含む難治性潰瘍、美容外科など多岐にわたります。形成外科は比較的新しい診療科でもあるために、他科の診療分野とのオーバーラップや新しい治療手技・医療機器の発展もめまぐるしく、形成外科医を専門として自負する以上はコンスタントに知識や技術の探求を行っていかねばならない診療科です。

日本形成外科学会のサブ学会として2008年に設立した日本創傷外科学会ですが、形成外科関連の学会の中でも非常に勢いのある学会で、皮膚科医や整形外科医だけでなく産婦人科医や外科医の会員数も増えているとのこと。これは、「創」と対峙するすべての医師が、めまぐるしい発展を遂げている創傷治癒という分野に関心を持っているということの現れでもあります。今後の医療の質の高まりに繋がると考えています。

私たち創傷外科専門医が目指すのは、シンプルにお伝えすると「キズを早くきれいに治すこと」です。そしてそれは形成外科医の基盤でもあり、ある意味形成外科そのものでもあります。

また、日本形成外科学会・日本創傷外科学会では共同事業として形成外科の認知度を高める広報活動を行っています。公式キャラクターの「なおるん」「きずな」をマスコットとして5月5日を「キッズの日はキズケアの日」と制定し、外傷などによって生じるキズ、またその癬痕(キズあと)の治療や予防の啓蒙活動を行っています。(図1)

一般的には「こどもの日」にあたる5月5日をキズケアの日に当てたのは、やはり日常でケガをしやすいのが子ども(キッズ)であることからです。キッズとキズの連想からという理由と、生活環境が変わったり気候が良くスポーツなどのレジャーが増える5月は怪我が一年で最も多い(シルバーウィークの制定で秋の怪我也増えていきます)時期でもあるためです。

さて、最近自身が経験した症例で、小児科医・県立中部病院形成外科と共同で治療に当たり、大変学ばせていただいた「キッズ」の一例をご紹介します。小学生の兄が使用していた家庭用



図1 「キズケアの日」ポスター



図2 受傷時



図3 処置後

のランニングマシンのベルトコンベアに右手を巻き込まれて受傷した1歳の女児例です。その際患児の父は同室にいましたが、受傷時は目を離して別作業をしていたとのこと、

似たような事故例ではデグロービング損傷（交通事故など）やスポーク外傷（自転車の車輪への四肢の巻き込みなど）は自身の経験や、他院での症例報告も多くありますが、医師経歴17年目、三次外傷救急センターでレジデント時代外傷を学んだ自身としてもこの受傷機転は初めてのものです、文献も渉猟する限りごく少数の国内外の一例報告と、アメリカの死亡報告例からマスコミが扇動したランニングマシンのリコールに関わる報告でした。当科受診時の創部は右手掌に熱挫傷のようなⅢ度の熱傷様を呈し（図2、図3）、機能的な予後も含めて今後も長期にわたるフォローを要する見込みです。

本例を通じて私自身が小児科医に教えていただいた中で、「Injury Alert（傷害速報）」について本投稿でもご紹介させていただきます。

日本小児科学会とこどもの生活環境改善委員会が共同で2008年に日本小児科学会雑誌と学会ホームページに設けたものです（日本小児科学会 injury alert <https://www.jpeds.or.jp/modules/injuryalert/>）。こどもが受傷する怪我や熱傷を診療していますと、「こんな事故が起こるのか」とびっくりする事例に遭遇しますが、それらは症例報告されることもほとんどありません。当院では昨年小児科医と形成外科医、ソーシャルワーカーが密に連携し、ネグレクトや親の知識不足などから発生する事故の予防に努めるチームを発動しました。しかし、そういった連携や情報がないために予防策につながらず、漫然と同じ傷害が起こっているという現状が多くあるのではと危惧します。重症度が高い傷害を繰り返さないためには、私たち医療者、そして大人がこういった情報を共有し、子どもを守り予防策を行っていくことが不可欠ではないかと強く感じた一例でした。